

48

特 242

541

國民更生の根本義

陸軍大將 荒木貞夫 述



* 0001462000 *

0001462-000

特 242-541

國民更生の根本義

荒木貞夫・述

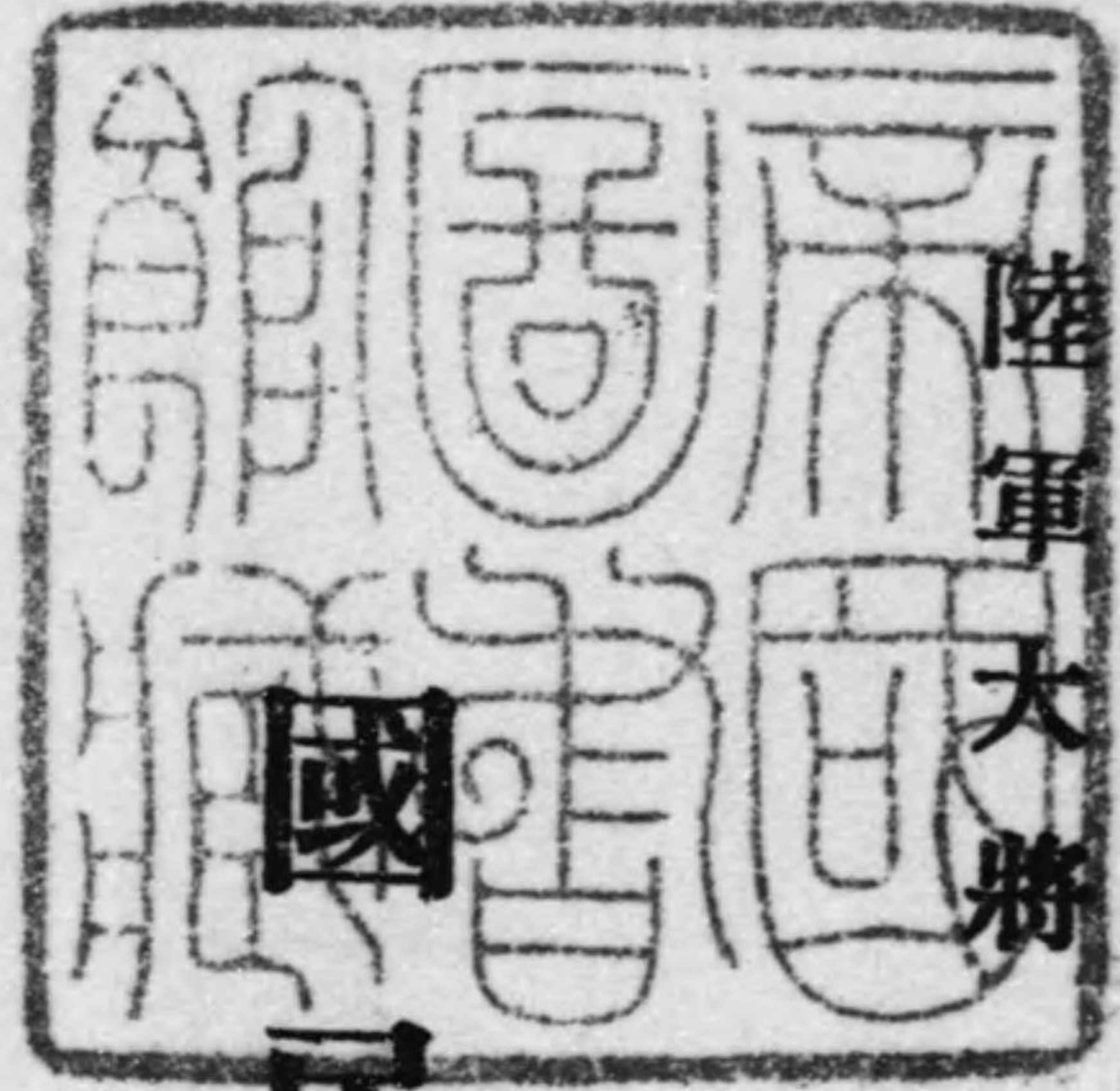
更生会

昭和 10

AAC

3
8

特242
541



陸軍大將
荒木貞夫述

國民
民生の根本義



本書は財団法人中央教化團體聯合會發行國民更生叢書第三編にして同會の承認を得て之を公刊せるものである。

國民更生の根本義

陸軍大將 荒木貞夫 述

本日茲に、東京市並に東京府の重だつた同胞市民の前に所懐を申述ぶることを得ますことは極めて光榮と致すところ
であります。元來私は軍人として今日御奉公を致して居りますので、斯様に街頭に出ていろいろ申し上げることは、或
は私の本分と致しまして、寧ろ他の方にお譲りをして、私共は實行方面に携はるが至當でもあらうかと考へて居るので
あります。只今も總理大臣より縷々お述べになりました如く、今日は内外を擧げての重大の時期であり、非常時で
ある故に敢て斯く演壇に立つた所以であります。従つて眞剣に本當に、重大なる時期であり、非常な時期であると考へ
になつたならば、私共と一緒にどうかして此重大なる時局を切抜けて寧ろ切抜けると申すよりも、之を押切つて、何處
までも幾度斯様なことが起りましても押切つて、而して一面に於ては國民としての我々の本分を盡して 聖明に答へ奉
り、一面に於ては日本民族の面目を發揮すると云ふことに付て一緒にやつて行きたいと云ふ念願で、寧ろ私が此處で御
講演を致すといふよりも、御相談を申上げたいと云ふ意味でありますから、どうかさう云ふお心持でお聽きを願ひま
す。故に申上げることが或は行過ぎて皆さんのお氣に障るやうなことがあるかも知れず、或は御参考になるやうなこと
があるかも知れませぬが、左様な心持でありますので、本氣で聽いて戴いて、私が誤つて居つたならば何時でも其過
ちを改めまして、皆さんと一緒に進むべき道に参りたいと考へて居ります。

第一に申上げたいことは、今日斯様な時局に際會して我々が斯様な重大なことを考へて、何とか致さなければならぬと考へますことは、是は非常に慶賀すべきことであらうと思ふ。只徒らに安康を食つて、樂に居眠つて暮して行くと云ふ考から、是ではならぬと腰を起したことは確かに國家の爲に慶賀すべきことと考へます。併し顧みまして過去に於て又今日に於て、何が不足であるか、私の私見を以て申すならば、總てのものに魂のない事である。如何に物が立派に出來上つても魂がなければ役に立たないのである。此頃人造人間が出來て居る。電氣やら各種の作用に依つて人間相當の業をするのである。二人前、三人前位の仕事をするのである。併しどうも此人造人間を友達として私共は永久に行きたいと思はないのである。又我々日本人が皆斯様な人造人間になつてしまつては役に立たない、神様に對しても誠に申譯のない次第である。我々の祖先から今日まで一つの脈々たる血管の中に流れて居るものは、日本人の精神であり、日本民族の精神である。それを苟くも受繼いで參つた以上は、如何に働きがあらうとも、魂がなければ、それは人造人間に變らないのである。人造人間は少くも物を食ひませぬ、世話は焼せないで、世の中が總て人造人間になれば食ふものも要らないし、開け放しにして寝て居られるのである。所が人造人間でない、而して智慧もあり、慾もあると云ふことになれば、喧嘩もすれば、笑ひもする。併し笑つても泣いても喧嘩をしても、警察の厄介になつても、そこに魂がある所に、我々は一つの非常な大きな生命を有つて、人間とし民族として行き得るのである。是等を考へると全く魂と云ふものがなければ、物の用には足らぬと思ひます。よく龍を畫いて目を入れない、目がないと如何に名畫であつても龍は活きないのである。繪は目に依つて魂を打込んで居る。然るに果してお互ひに私共が考へて、どれだけ一體我々が魂を有つて、今日世の中に、殊に日本國民として、又日本民族として立つて居るかと思ふことを考へると、誠に申譯のないことが多々あるのではないかと考へるのであります。何に原因するか、餘り考へ過ぎた結果ではないか、餘り目の前

に囚はれ過ぎた結果ではないか。成程我々は人生五十年、其間に面白、おかしく暮さなければならぬ。是は誰も考へることであります。今の食事は旨いものが欲しい、今は樂にしたい、眠い、誰にも慾がある。それを其儘やつて居たんで人間も動物と變らないのである。犬猫は食ひたい時に食ひ、寝たい時に寝ます。其代り世話は焼せない。ロシヤ物語の中に面白い話があります。或處に豚が居る、豚は動物の中でも餘り利口でないものとせられますが、此豚が或る日、椎の木の下で、椎の實を拾つて食べてすつかり腹が一杯になつた。聽て居眠りを始める、目が醒めて見た所が何も所作がない。そこでとうとう悪戯を始め鼻で頻りに椎の木の根を掘出した。さうすると椎の木の上に鳥が一羽止つて居つて「おい豚さん、一體そんなことをすると椎の木が枯れてしまふよ、お前は今椎の木から椎の實を取つて食つて腹を太くしてそれで生きて居るのに、さうやつて椎の木の根を掘ると枯れてしまふ」と言ふた時に、豚が鳥に向つて「いや、俺は椎の木なんぞ要らぬのだ、椎の實さへあればそれで腹が太いからだ、椎の木は枯れても差支へない」と言つて一生懸命木の根を掘つて居つたので、鳥が阿呆々々と言つて飛んで行つたと云ふ物語があります。魂がないとそこに至るのである。國家の下に生れて居りながら、俺さへ腹が太ければ宜い、國家などはどうでも宜い椎の木が枯れても、俺は椎の木からこぼれて居る實さへ食つて居れば宜い、腹が太いから宜いのだと言つて掘つて居れば自らも滅びるのである。是はロシヤ物語にあるので、大變面白い話と思ひます。斯う云ふ物語は日本にも澤山あるが、魂がないとそこに至ると云ふ一つの例であると思ひます。然らば我々一體どう云ふ魂を有つて今日やつて居るかと思ふと、動もすると只生て居れば宜い、何とかして食つて行けば宜い、今日起る所の生活の問題、やれ俺は食へないから食はせろ、人間が食へないでどうする、まあさうやつて力んで見た所で、それじゃ魂がないので、どうしても犬猫が豚の仲間に入らざるを得ない、何の爲に生きて居るのです、此處を一つ考へたい。

も一の例で申すならば、私が先般まで熊本に居つた時分に、私共の官舎の向ひにお稻荷さんがあつて、其前に大きな木があつた。今は伐り取られました。其下に乞食が毎日店を出して居る。其お稻荷さんが花柳界に流行つて、毎日花柳界の人が朝夕お詣りする度に、其乞食に恵むのである。官舎の前ですから、私は毎日出掛けと歸りがけに見るのです。だん／＼考へて、自分の魂を忘れて見ますと、始めは非常に美しくなつた。彼は自分が入るだけの家を持つて居つてそれに車が付いて居る。屋根を掩ふてある前の方に臺所があり、後ろに本箱があつて、眞ん中は寢室兼座敷である。夏など陽が射すとつと木の下の風向の方に座敷を向けて居る。毎日適當の時に風が入つて陽の當ることがない。暇な時になると外を掃いて居る。さうすると往來を通る人が誠に感心な乞食であると褒めて居る。冬になると其座敷を日向に出して、朝は東に向け、晝頃は南に向け、夕方は西に向け、朝から晩まで陽が入つて居る。而も日向ぼつこをしてやつて居る所を見ると悠々として迫らないのである。何か分らぬが本を讀んで居る。其間に訪問客に妨害せられるでもない、面會人に邪魔をせられることもない。何時何分にも何處に出張するのでもない、何時に寝て何時に起きても構はない、ゆつくりと本を讀んで居る其前に、花柳界から幾多の令嬢か藝妓か知りませぬが、物を投げて居る。それを無意識にかちんと言へば只斯うやつて頭を一寸下けて居れば宜い、其間はだん／＼本を讀んで居る。修業をして居ると思ふのであります。さうして町内から町費などは取られない、所得税も取られない。何等の義務もない。さうやつて居つた夕方になると何處かに行つてしまふ。雨など降ると何處に行くか分らないが、天氣の良い日は出て来る。私共考へると明日は午前七時きつちり、早くても遅くても何處そこ聯隊の營門に到着せねばならぬ。朝起きて顔を洗ふ暇もない。其の間に人と話をしなければならぬ。好きな本を讀むことも出来ない、生活の餘裕もない。然るに此乞食はどうして居るか、

だん／＼調べて見ると驚くなかれ、千圓とか二千圓とかの貯金を有つて居る。千圓の貯金を持つて人に妨げられず、自分が往來を掃除すれば褒められ、町費も所得税も縣税も何にもなしで、毎日日本を讀みながらやつて居れば一生を暮して行ける。一寸見ると非常に美しいのである。故に若し只生きて行きたいと仰しやるならば、宜しく熊本の稻荷村の前に行つて渡りを付けて、其近所に乞食店を出せば食うては行けるのであります。併し考へて見ると、民族の魂も國民の魂もない、何の爲に千圓なり二千圓なりの貯金をしてさうやつて居るか、世を捨てたと言へば捨てたのであらうが、是で若し人間が宜いと云ふならば、我々は生き甲斐がない。何故に魂が掴めないか、もう一歩行つて、之を善意に解釋すれば、すつかり世の中を悟了して、恐らく人生を越えた本當の哲人、本當の名僧智識等があつてやつて修業して居ると考へると解釋の出来ないこともないが、それだけではどうも私は國民として相濟まぬではないか、是は一つ魂なしに只生きて行きたいと云ふならば、敢てマルクスをお願ひして、やれどう云ふ政治機構だ、やれどう云ふ經濟機構だと思ふしやらすとも、宜しく去つて熊本に行つてお稻荷さんの前に店開きをすれば宜いしのではないかと思ふ。國としても同じことで、若し國が魂なしでやるならば世界の乞食になれば宜い、民族として若し魂を失つて宜いならば同じく世界の乞食になれば宜い。只生きて行けば宜いと云ふのならば澤山方法はあるのである。魂なしで生きて行つてどうなりますか、此處に御列席の方は悉く東京府市民である。東京府市の一員としての資格をお持ちになつて東京府市の全般を双肩に荷つて居るのである。そして又日本人である日本國民としての總ての責務を荷はれ、又義務も果さなければならぬのである。もつと大きく申すならば國民として、皇猷扶翼の大任を果さなければならぬ。我が國の道、我が國の總ての道徳を發揮して行くべき、皇室を扶翼し奉らんければならぬと云ふ責任があるのである。斯う我々が考へると、もし此魂を打込まなければ、我々は人造人間となつてしまふか、或は生活は安固で人から羨ま／＼か知らぬが、只今のお稻荷さ

んの前の乞食と同じに墮するのではないかと考へるのであります。

六

斯様に考へて、我々が日本人として、日本國民として此處に考を起しますと、もう此難局も、此重大時局も、私はそこに甦つた時には、必ず恐るゝに足らぬ、何等考ふるに足らずして押切つて、之を打開し得ると考へる。其自覺がないから、此難局に對して狼狽をして、悲鳴を上げるのではないかと、斯うも考へて見たいといふのである。我々は斯う考へて先づ皆さんに御相談いたしたいことは、日本國民として有つて居る所の本心を一つ此處に擱へて見ねばならぬ。我らは何が本心であるか、何處に日本人の特長があるか。それには各民族の神話を取るのが一番結構と思ふ。各民族は必ず神話を持つて居る。神話と云ふものは其民族の理想を現はして居る。其結論として私共の頭に浮んで來ることは、我々は奮闘いたさねばならぬ。どんな難關に際しても奮闘努力をして、打克つて行つて、此處に日本民族の面目を發揮することが、我々の第一に魂として打込まなければならぬことと考へられるのであります。誰でも人生觀を考へると起つて來るのは、人間は何の爲めに生れて來たか日本人はどういふ譯で生れて來たかといふ事である。いろ／＼検討すると議論は澤山出ませうが、民族の理想の表現たる神話を取つて日本人と云ふものを考へると、御承知の如く伊弉諾尊、伊弉册尊に依つて始めて日本の民族の始祖としての神様が現れ給うた。そして日本の國土ばかりでなく、日本民族も、日本の總ての力も皆御造りになつて居る。其時に「漂へる國を造り固めなせ」と仰せられた。此漂へる國を造りなせとの神意は、此混沌たる所から理想郷を現出せよ、此混沌たる中から日本人としての本當の仕事、本當の精神を一つ打立てよとの意に外ならぬ。混沌たる中から造り固めなして、本當の日本、豊葦原瑞穗國とする。其爲には懐る手をして居つたり、頬被りをして居つたりしたのでは、とても出來ないのでないか。どうしても奮闘努力の要がある。漂へる國とは

どんな所か、漂へる國とは、あなた方が既に御實驗のある通り、大正十二年の九月一日の正午をお考へになればお分りになるではないか。あの正午の關東の大震災でがらくと行つて、二時、三時、四時、五時、六時、東京全部が悉く火の海となつた時に、此漂へる東京から今日の東京を作り固めなつた第一歩を考へたら、誰でも俺は炬燵であつて居る、暑かつたから氷でも飲んで團扇でも使つて居らうと云ふ人がありませうか、恐らくは一人もなかつた。唯最も氣の弱い日本魂のなかつた者は、是は大變だ、火事と朝鮮人を一緒にして逃げてしまつた。さうして我々の同胞の朝鮮人を、是は過つてゝあるから其罪は咎めませぬが、襲撃して來たといふので、朝鮮人は大變迷惑をしたのである。さうして慌てた者はどうしたかと云ふと、水の中なら大丈夫と云ふ譯で、皆な船を浮べて川においそれと出掛たのである。魂なき船は決して火を消さなかつたのである。皆船に乗つて東京市は潰れたつて自分一人だけの財産を持つて逃げれば宜いと船に乗つた所が、船に「東京市」を全部乗せてしまつて船が動かなくなつた。其の中に飛火がやつて來たものだから、とう／＼荷物も生命も船も東京市も、一緒に敢果ない最後を遂げたのである。實に九月一日を考へると一方に於ては情なく考へるのであるが、一面に於ては誠に同情すべきあの状況を生んだのである。只氣の利いた本當に魂の甦つた者は、さあ何だ、斯う云ふ風に混沌として天地がどうなるか分らない、地球が二つに割れるかも分らない、其時に財産もなければ何もない。地球が二つに割れた時に自分が生きて居つてどうする。死出の思ひ出に俺は魂を發揮して死ぬか生きるか知らぬが日本人の誰が見て居らぬで宜い、天も知らず、地も知らず、人が知らぬでも宜い、自分だけが最後の日本人として働いて見やうと思つて、總ての財産も何も措いて、一人出て來て、さあ何處だと云うて立上つたのであります。それが一人立ち、二人、三人、四人と固つて行つたのが佐久間町とか其他二、三の燃残つた所である。さあ火を消すんだと言つて火を消して、とう／＼未だに儼存して居る、財産も残れば家も残り、家族も残り、今日は名譽も

七

残り、當時の手本になつて居るのである。此聴衆の中には或は其附近の方が大勢あらうと思ふ。他日此詳しい話をゆつくり承はりたいと考へる次第である。甦つた者はどうして行つたか、自分を捨て、行つた、東京市はどうなつても宜い、我一人宜ければ宜いと言つて荷物を擔いでこれなら大丈夫と船を浮べた者にあらずして、さあ斯うなれば自分の不斷からの考、即ち自分が今青年團なら青年團、在郷軍人なら在郷軍人、市民ならば市民として、斯う云ふ時に働くと云ふので、自分の町を全部背負ひ、東京市を全部背負つて立つて、協力一致して参つた人は反對に助かつた裸で出掛けて行つて、名譽も捨て、慾も捨て、此處が自分の務めだと言つた人がちやんと今日東京市の真ん中に残つて居る。魂がなくんば億々萬圓の財産も、王侯宰相の名譽も何の役にも立たないのである。常陸山が何人居つた所で役に立たないのである。魂があるならばたつた一人でも、二人でも、今日まで名も知れない人であつても今だけのことはするのである。私は此處で御披露するに非常な光榮を有するのであるが、只今私の所に馬丁が居ります。現在私の所に居る者を此處で發表することは甚だ徳義の上に於て申譯ないのですが、實際の只一つのお手本として申上げたのである。此馬丁は平生はてんでお役に立たない様に見える、第一吃つて居つて口が本當に利けない、慌てるにあつた切り口が利けない、それから主人に向つては物を聞き返すことが、どうも相濟まぬと思ふのか聞き返さない。何か言ふとはいくと言つて居るから分つたのかと思ふと分らない、分らないが、聞き返すといかぬと思つて言はない。會つて書物を持たして人の所へ届けにやつた所が、途中で汽車から降りて私の後を尾いて行く中に離れてしまつた。何でもこつちと仰しやつたが分らない、口は吃るし、行先きは分らない。とうとう心配の餘り腦貧血を起して倒れてしまつた。私は先きに行つて待つて居るが、肝心の本が來ないから電話を掛けて見ても分らない。其中に近所に知つた人が居つて其人から電話で、今實はあすこで急に胸が悪く、頭が悪くなつて倒れて寢て居るから、暫らく休ませてあるとの事で、其後其

本を持つて來たと云ふやうな譯で、不斷は間に合はないのでありますが、只一つ極めて眞剣な魂を有つて居る。此男のその魂は關東の大震災火災の時に現はれたのです。私は其時はまだ其馬丁を使つて居ないので、震災當時、此馬丁の使はれて居つた憲兵司官の官舎が壊れた。丁度正午であるから瓦斯を使いて臺所をやつて居る時である。皆慌てゝさあと云ふので逃げ出す。今申上げた恥辱の第一歩を始めたのである。東京市民がさあ大變だ、そら何の財産だ、婦人はダイヤモンドの指輪だ何だと考へて居る時に、其馬丁は此處ぞ大事と云ふ頭が起つて來たと見えて、倒れた家の中に黙つて入つて行つた。どうしたのかと思ふと皆瓦斯を捻つた。さうして自分が何をしたらか知らぬ顔で濟してのそく出て來た。其お蔭で其官舎は火は出ず、日本屋は潰れたが、片方の洋間は今現に大手町に其儘残つてゐるのである只此馬丁は己と云ふことを考へず、主人と云ふことを考へ、私と云ふ事を忘れて公と云ふことを考へたから、是は大變だ、官舎が潰れた、之を焼いてはいかぬそれ瓦斯だと、不斷頭が働かないものが、其時には却つて、外の人が自分の慾に囚はれて居る間に、瓦斯は悉く捻つたのである。東京市民が當時悉く其考を有つて居つたならば、私はあれ程の慘劇はなかつたのではないかと思ふのである。是等も一つの魂が大事であるといふ好適例である。此點を是非お考へになつて第一に日本人は奮闘努力から生れて來たのであるといふ魂を銘記されたい。此混沌たる即ち過般の震災の時の東京の様な混沌の中から生れ來つたといふ事を考へ、そして今日の東京を見たのは即ち奮闘努力の魂の爲めである事を承知し、此地震に打勝ち此火事に打勝つといふことが今日の東京を再建したのである事を悟り、先づ魂から精神から振り起つて行つたならば、一馬丁でも瓦斯を捻るだけの手段は考へられる。況んや東京は水道が壊れて水がないから、とても火は消えないと、ポンプをそこに置いて眺めて居たんでは、奮闘努力が足りないのである。火は水を以つて消すのが普通ですが、水がなくても火は消えるのである。砂を掛けても消える、踏み潰しても消える。いけなかつたら三百萬の東京市民が、一、二、三、ふつ

と言つたら、恐らくは其氣持で行つたなら消えるであります。殊に日本のやうな家ですと、ボンブでやる代りに薦口でたゞき壊しても宜い。ほつと燃えたら廻りを壊してしまへば眞ん中が残る。それが佐久町であつたか、早くあの邊は消防をやつたから残つた。水でなければ火が消えないと云ふのは餘りに、打算に囚はれて居る。今日それで行き詰つたといふて呆然として居るのである。三百圓儲かつた、後は幾らで一錢の損になるから此三百圓は先づ使はないやうにして置かうと云ふ打算をするからいかぬ。必要ならば一錢餘計出ても使ふべき所は使ふものであるすれば水がなくなると火事は消えるのである。もう一步前に行くならば、其火事になる前に瓦斯を皆捻れば宜い。或は自分は焼け死ぬかも知れない。しかし自分一人で東京市民三百萬を助けてやると斯う考へになれば、必ず全部が助かるのである。此點をお考へにならなければ、どんなに組織を良くしても、何を考へ出しても、東京の大震災火災の様な事が来れば皆駄目になる。そこで魂である、然り奮闘努力である、「混沌たる深へる所から此國を造り固めなす」のであるから、平凡な事では駄目である、如何なることが混沌たることかと申したならば、今日のやうな世相又大正十二年の九月一日の大震災火災のやうな時の東京市の事である。此場合我々は如何にすべきか、そこは今日の東京を再建した様にあなた方も我々も奮闘努力したのであるから、善かれ悪しかれ、大きかれ小さかれ、やりのけたのであるから其積りでやつて行けば宜い、即ち奮闘努力しなければ日本が生き得ない。絶へず關東の大震災火災を相倒したして、之に處する道を考へて、國家の上に御奉公なされたならば、如何なる難關でも、今日位の重大時局、非常時などは、是は朝飯前位の仕事であると思はれるのである。故に私共としては此漂へる國を造り固めなせとの仰せによりて、大八洲日本が生れ、此漂へる國を造り固めなせとの仰せで日本人が生れ、神様も生れ、力も生れて來た所の我が日本であります。斯く我々は理想を持ち、斯く我々數千年前から考へて來た所の日本民族であるからには、奮闘努力せなければならぬ。而して奮闘努力の向ふに必ず難關があるの

である。其難關に向つて奮闘努力、もう一つ地震がないか、雷がないか、津浪がないか、また來いと志氣を振はぬばならぬ。況んや今日のやうな此幸福な間に、若干來て居る重大時局、難關の如きは私は是は難關の中に入らぬじやないかと思ふのである。どうぞ此處に一つの魂を有つて戴きたいのであります。

◇

次は此奮闘努力に依つて之を切抜けるのに如何なる方法を以て行くか、いろ／＼な方法があります。之を切抜けて行く一つの方法と致しましては、日本の道である。何の道に依つて行くか、是はあなた方の耳に十分入つて居る如くに、日本の建國の精神である。何處の國に何處の社會に何處の世界に持つて參つても一步も譲らざる所の日本の道である。何と申しても此建國の精神は何處までも皇室に保たせられ、皇室は此道を三種の神器の諸徳に則らせ給へるとは疑はない事實である。此處に日本の國の尊さ、日本の國の眞の生命があるのである。故に日本國民としては此三種の神器の徳に依つて何處までも進まねばならぬ。而して此徳を永久に天壤無窮に傳へ輝かしむるこそ、我々日本國民が持つべき精神でなければならぬ。即ち第一、鏡に依ります所の公明正大の徳である。今日我々が苦し公明正大と云ふことを考へるならば、これも公明でなかつた相濟まぬ、あれも公明ではかつた相濟まぬと云ふことが多々あるだらうと思ふのである。それではいかぬ、先づ此公明に向つて進まねばならぬ。次は博愛、仁愛の玉の如き徳に向つて進む。是があれば今日お互ひが救濟せよなどと言はれぬでも、さあお前は困るか俺が負ふて行つてやらう、目が見ないかそれでは手を引いて行かう、かう我々全部が上から下まで考へた時に、何で今日の國內問題の解決が出来ないことがありませう。其徳がなくて俺一人、東京市民俺一人と考へるから大震災火災のあの悲惨を見る。東京市の爲なりと考へ、東京市三百萬人の爲と考へて行くならば恐らく東京は當時救はれたであらうと考へらるゝが大震災火災中にも其徳が段々と現はれて居

る。林檎一つ得た時に恐らく、あなた方は、林檎が一つあるから之を懐に入れて、人の見えない所で食はうなんと云ふさもしい考はなかつたと思ふ。之を四つ切り八つに切つて、一切でもと互に分けてやつたのが是が日本人殊に江戸子の本當の精神であつたらうと思ふ。ラムネ一本ある時に、さあと言つて皆で飯み合つた時に、お前は本所か、俺は浅草だお前は何黨か、俺は何黨だと言ふことは決してなかつたらうと思ふ。直ぐにさあと云ふ譯で、年寄も子供も兎に角そこに居つたものが如何なる者であらうと分けたのではないかと思ふ。しかしもう一歩行過ぎますと、日比谷公園の鯉を皆取出して是は結構と云ふので食ふ事になる、過ぎたるは及ばざるに如かずで今日日比谷公園に行つてこれをやつて御覽なさい、是は結構と言つて決して許されませぬ。當時は己む得ない、非常時である、鯉それは結構だ、鮎それも宜いと云ふので皆池から捕へて食べた。そこに少しの私心もない私心がないから人も許し我も許す。併し渴しても盗泉の水を飯むな、斯う考へるのもよいでありませう。たとへ食ふのは悪いかも分らぬが、私心がなければ結構、是は仕方がない、鯉もこれを以て成佛致すで御座らう。さうするのが必ずしも宜いと云ふのではないが、それも決して其當時には何とも考へられなかつたのである。此邊で大抵仁愛の道もお分りになつたらうと思ふ。で、一つ自分の物は人の物、人の物は人の物、斯う云ふ風に行けば宜からうと思ふ。自分の物は自分の物、人の物は自分のものと云ふからいけない。もつと大きくなれば自分の物は即ち東京市の物、東京市の物は即ち日本國の物、日本國の物は悉く、陛下の物、陛下の御徳、即ち今の公明と仁愛の此御徳のものであると考へた時には、儲けるならうんと儲けなさいうんと儲けて少しも恥かしくもない。其儲け得たものを之を東京市に投じ日本國に投じ、陛下の公明にして仁愛なる御徳をお達しするやうに皆投すべしと考へて居れば、金の爲に不徳を爲す事はない筈である、所が之を皆自分の懐ろに入れてしまふから何の役にも立たない。先程に話した乞食と同じである。千圓の金を溜めて乞食して何にする。此邊が日本の道として我

々は奮闘努力をして行きまして、公明にして而して仁愛の道を踏んで實行して行けば、それが劍の徳になります。劍の徳は公明と仁愛を必ず決行すべき強き意志であり強き力である。何をする力だ、人の首を斬つたり血を見たりする力ではない。公明と仁愛を必ず實行する、萬難を排してこれをやる力、意志である。苦し障害があるならば己むを得ず涙を振つて劍を使ふのだと云ふ精神も此劍が伴ふて居るから實行が出来る。只公明と仁愛とを幾ら口で申しても實行しなければ役に立たぬ。絶へず劍の意思を以て、さあやるんだと云ふ劍の徳あつて、公明と仁愛が行はれて行く。是が我々の踏むべき手段方法の道で、隠れもない紛れもない日本の道であると思ふ。そこで日本人が奮闘努力をして、公明と仁愛とを此劍の道を以て必ず斷行する。此處に始めて日本人たる面目が生ずるのである。此道は教育勅語にお示しになつて居ります通りに、何處に持つて行つても恥しくない。何者が一體此上に批評を加へ得るのであるか。此の道を行ひ得る爲に我々は世界から知識も求めませう。自分の智慧も磨きませう。自分の身を良くも致しませう。其爲に總てのものに勵むが宜しい。佛敎の御研究もそこにあるであらうし、儒敎の御研究のそこにあるのだらう。要するに公明と仁愛を實行すべき其道筋を研究するのである。彼の儒敎の大學の道に依つて行くならば格物致知であつて、それでだん／＼に道を開いて行き、終に斯うすれば宜い、あゝすれば宜いといふ智慧を了得し得る。一體我々日本人は總て世界のことを自分の中に抱擁して、それを消化して行く本性を持つて居る。此處に何等排他の所がない、獨逸人來れ、亞米利加人來れ、伊吉利人來れ、伊太利人來れ、我々は何の恐るゝ所、何の恥しい所があるか、此處に一つ大事な基礎を置いて戴きたいのである。是だけを體得すれば私共の行くべき道が出来て、如何なる難關に對しても乗り切り得るのである。奇異な比喩ではあるが斯く考へれば地震に付て怖いと云ふのは間違ひで、日本に生れたならば地震は自分の兄弟と思へば宜い。地震なしで日本人は生きて行かない。昨夜小さな地震がありました。これは自分の孫位が來た位のもので、關東の大震災は自分の弟分位だ、地震が怖け

れば日本には住めませぬ。地震が怖いならば宜しく去つて亞米利加に歸化すべし、露西亞に歸化すべし。地震のない所が世界に澤山あるからそこに歸化するが宜い。地震が来たならば兄弟が来たかと歓迎する。どうして之に打勝つか、どうして之を導くか關東の大震災で東京市及關東の人は非常な仕合せをした。即ち非常な試練を受けて居る事である。それに遭はない人には何と話をしても分らぬ歐羅巴大戦争當時歐羅巴各國民のあの苦心に付てはそれに遭はなければ分らないでせう。我々日本の同胞に、當時の事を話しても分らない。さて震災に就ても経験せられた通りこれに打勝つにはお話しした通り己を捨て、さあ火を消せといふ氣持になり、又家を建てるならば潰れても差支へない家を建てる、鐵筋コンクリートなどで建てるから心配である。地震が来て上から落ちて危ない。落ちて来ても構はないやうな家を案出すれば宜い。ぱつと潰れて来ても首が抜け出して、其附近の瓦が悉くビスケットに化けるやうな家を拵へて置けば宜い。或は丸い家を拵へる、中が心棒になつてぐるぐる廻るやうな家を拵へる。地震が怖いと思ふから地震と争つて鐵筋コンクリートの家を建て、地震が来て大丈夫と思つて居た所で、何千年の間にはもつと大きな地震が来て皆潰れて仕まうかも知れぬ寧ろ地震に打勝つ魂を作つた方が宜い。斯くして工夫をすればいろいろ新案が出来る。只地震が敵なりと思つてかつとなるから恐怖したり常念を失ふ事になる。地震は自分の兄弟と思つて氣安く考へれば何でも出来るのである。そこに第一肝要なのは此の心持で國民の訓練をするに云ふことである。さう云ふ點も特にお考を願ひたいと思ひます。

◆
今一つは海。私に陸軍ですが、海文けはお忘れないやうにお願ひするのです。海なくして日本はない。大八洲の國、最初から海の中にはつんくと出来たのである。先程御話した伊弉諾尊、伊弉册尊の神意によつて出来た大八洲なのである。海なくして日本はないのである。日本は海に恵まれて居る。同時に非常に海からの試練を受けて居る。大きな浪

怒濤に依つて始終洗はれて居る。此海から我々は將來必ず日本人の眞面目を發揮し得ると思ひますから、海だけはどうぞお忘れないやうに願ひたい。と云ふてお前に陸軍など止めてしまへと云ふことは困りますが、大陸に一步を踏み出して居りますから、仕事をするのは陸の上である、唯海の上で魚を支配して見た所でどうも大平洋知事なんと云ふのはないので、海を忘れぬ必要はあるが、道を行ふは陸に於て人類を相手にすれば即ち陸にあるのである。其資源は總て海から取る、海で訓練をし海のものをして生活し、陸に於ける所のお互ひが己の道を行ふと云ふことにせねばならぬ。海に就ては諸君も知らるゝ如く我國は恵まれて居るのである。本年のオリンピックに見ても御覽なさい。何と西洋人が豪語しても海じやお氣の毒であつたが我國に對して如何ともならぬ。我選手はたつた一つ選手権が得られなかつたと云ふだけである。後は悠々と選手権を得て居る。今から何年か前のオリンピックの時は、水泳はどうであつたか、西洋人の眞似ばかりして遊いで居つたからいけない。これは日本人として考へた魂を入れて、日本人は身が小さい手も足も小さい、併し日本人には日本人としての特長がある。これを自覺したから宜いのである。如何に歐米人等が何と申しませうとも、全く日本だけであれだけの選手権を得て、あれだけの優勝をした。あの點數を見ても海だけの問題なら世界が何と申したつて及ばないのである。將來は大に海に向つて船を浮べて行く、必ずしも大きな船許りを造らぬでもよい。小さな船で引くり返つても宜いやうな船を造る。船が引くり返つてもこつちから首を出して行く。餘り大きな船許りを造るから時には暴風雨に遭うと沈没するのである。で、ぐるぐる廻る船を拵へて其時々に先づ魂で萬象を征服する方法を先づ考案する事が肝要である。食べ物がなかつたならば海の中から獲る。海藻の中には沃度も入つて居る、蛋白も入つて居る、海には鹿角菜もあり昆布もあり若布もあり荒布もあり何でもある。脂肪が欲しかつたら、敢て豚やら牛やらに頼らなくても、鰯や秋刀魚などと云ふ宜いのが澤山ある。餘つたら肥料にでもそれで宜い。金がなかつたなら

ば、海の底に入つてダイヤモンドでも金でも探すといふ位の意気がなくては新興日本の將來は覺束ない。此位の考で海はもう日本のものとはつきり目に寫るやうにして始めて、日本は本當に世界に腕前を發揮する事が出来ると云ふことをお考へ願ひたい。是は魂をそこに持つて眞個の日本人として考へる。今まで何故に海の事が進歩しなかつたといふに、歐羅巴で研究しないのだから日本でも研究を怠つたのであらう。歐羅巴では海など相手にしない、英吉利はあれだけの海軍國海運國ですが、只陸から陸へ通ふ所の海の聯絡だけと言ひ得る。海の凡てを熱心に本當に研究して居るとは考へられぬ。であるから今日迄の如く日本人が西洋に行つて學んで來ても一生懸命陸の上だけでやつて居る。島國が陸の上でやるのは間違ひである。例へば洋行者は鐵道だけ覚えて、何處も鐵道のみかけて船を十分に使はない。それが今はトラックに押されて鐵道は困つて居る。何故船を使はないのか、どうせ群島ですからトンネルを作つて行けば宜い様なものゝ、さう矢鱈にそこら中トンネルばかり作れないから、船を作れば宜い。快速船を造つて、モーターボートで、引くり返つても大丈夫のやうな船をどん／＼新造する。元來船で荷物を運搬すれば安い、汽車位の速力で行つて何處の港へでも入れるやうにすれば非常に結構である。出来ないか出來ます。それには築港を一つ研究しなければならぬ。若しいけなかつたならば、築港携帯で行く、ずつと自分が波止場に行つたら築港のやうな恰好をして入つてしまへば宜い。お笑ひになるけれども、それはきつと其内に船自體で築港の代りをするものが出來ると思ふ。今のキャタピラと同じである。自分で以て線路を拵へてすん／＼行く。今のタンクは自分で線路を引張つて行くから同様に船も港を持つて航海して行く様なものを作る。所が日本の總てを御覽なさい。鐵道だけはずつと架かつて居るけれども、港らしい港はない。南西諸島に行つて見ますと、鹿兒島を出發してから港らしい港がない。船で行けば少し風が吹けば止まつてしまつて出ない。斯様ことも一つの御參考にお考へ願ひたい。家を造りましても着物を造りましても總てのものを日本式に其儘本當に研

究しなければならぬ。我々も其點に付て考へねばならぬ。例へば軍部の方面にしても、我々が研究しなければならぬことは總ての金屬の問題である。西洋では金屬で總て造つて結構である。非常に乾燥して居るから錆びない。所が日本には梅雨があり、濕氣がある。海氣があり潮氣があるところで、總て金屬でやらうとするから皆錆びてしまふ。我々の拍車、軍刀、皆金物である。昔は日本は漆でやつて居る。漆ならば濕氣が少し出て來れば結構である。剥けないで少し濕氣が出ると宜いやうに漆が出來てゐる。此頃に錆びないメタルが出來てゐますから、少し善い様なものゝ少し考へる必要がある。考へて來ますと歐羅巴や亞米利加で研究したのを、おいそれと云つて日本で鵜呑にしても一つも當嵌らないものが出來る。總てがさうである。それはそこに日本の魂を打ち込んでやらぬからである。餘談になりましたが、是も一つ御參考に申上げて置く點であります。

◇

それから今一つよく問題になるのは三種の神器の劍の問題であります。日本人は好戰國民である、血が好きであるといふ。是は大なる間違ひである。日本人程血の嫌ひなものはない。血を見ることは恐れませぬが、血を見ることは好んでは居らぬ。併しながら只徒らに仁愛の道を説いて、そこに仁愛の自らの正義觀を實行するだけの觀念のないものは必ず惡に依つて潰れるのである。正義が惡に依つて亡びるのである。如何に理窟を申しても、假りに山中に入つて、諸君が狼に出逢ふた時はどうするのであるか、狼は直ちに飛びかゝつて我々に食つてかゝるのである。狼自身から言へば、天が狼には人間、兎、さう云ふものを食へとちやんと示してあるに違ひないと考へ居るであらう。であるから狼は生きむが爲に人間に向つてやつて來る。其時分に物を殺したり、物を潰したりすることは惡である、左様なことはするものではない、狼よ狼よお前の考へ通り食つて呉れと云ふたらどんなものである。世の中は悉く豺狼の天下になるではないか。

我々は何としてもこれに抗せなければならぬ、否これを斃さねばならぬ、只自分の命が怖いと云ふ本能的の意味じやない。人間が自分としての使命を受けて、此社會に立つた以上は、人間としての使命を果し、自分の道を行つて行きたい。そこに眞剣に魂が燃へてこそ狼に對して、汝は我々の道を妨げるかと云うて之を征せねばならぬ、此狼を殺すことがいけない血を見ることがいけないといふなら、宜しく球數を以て人道を説て見るが宜しい。狼が聞くか聞かぬか試みたら宜敷でしょう。要は自己の道、自分の使命を果し、日本人としての道を果すと云ふ信念の上に、狼が来るならばそれは如何なる狼であらうとも、また人間の形をして居る狼であらうとも、斷じて許さずして劍を振はなければならぬじやなか。此處にしっかりと信念がないと、やゝもすると所謂宋襄の仁になつて亡で仕まう。抑も世界の民族も國家も、悉く我々と同じ人間であるから、人間である以上はどれもこれも同じである。それを更に擴大して動物は悉く同じである。宇宙のものは悉く同じであると言つたら人間はどうなるか、米を食ふことも、豚を食ふことも、魚を獲ることも出来ない。此處によく鑑みて我々日本人の行くべき道を堅く取つて、奮闘努力を基礎としまして、公明と仁愛のために血を恐れず進まねばならぬ。扱て公明と仁愛は何處から始まるかと申すに我々自らを完成するより始まる。自分自らは完成すると共に自分の親戚故舊を完成し、自分の子孫を完成してそこに世界の總てのものゝ完成に向つて進むにあらずば、到底世の中に立つて信念も何も出て来ない。即ち私が第一に申上げた自己日本人として立つて行き、日本國民として立つて行くと云ふことを考へなければならぬであらうと思ふのであります。思ひ起しますに孫叔敖の昔話であります。孫はあれ程の仁人君子であるが。彼が會つて兩頭の蛇を見た時に躊躇なく之を打ち殺したのである。傳へ言ふ所に依りますと、兩頭の蛇を見た者は命がない、其命がないと云はるゝ兩頭の蛇を見たのであるから勿論命がない。そこで通常なら泣き喚いて、家に歸つて神佛にお願ひをして、其兩頭の蛇にお供物をして、どうぞ私の命を助けて呉れと、精

神のないものは斯くなり勝なのである。然るに孫叔敖は直ちに躊躇なく立つて此蛇を殺したのである。自分が可愛いので殺したか、彼の申してゐる所に依れば、兩頭の蛇を見た者は死ぬと申し傳へられてゐるが、自分は見たから己むを得ぬ、自分は死なう、併しながら之を生かして置いたならば此後何人、何百人の人間が此蛇を見て恐らく死ぬであらうから、蛇が七代崇らうとも百代崇らうとも、我は此蛇を殺して後難を除くと言つた。そこに尊さがある。諸君これだけの勇氣、これだけの正義觀が燃えなければ、死に當りて後人の事を考へられない。只自分一人、極めて小乗的の博愛、仁愛のみを唱へて居つたのでは、世は豺狼の世となると思ふので、そこにも自分個人と云ふものにしつかり魂を打込んでかゝれば總てのものが直ちに道に適つて着々として處理出来るのではないかと思ふのである。我らが軍部に御奉公するのも其趣旨に外ならぬのである。又皆さんが各々お職務に従事せられるのも同じ心持であらうと思ふ。其心持々々が一緒になつて、日本が始めて一體舉國一致になり得るのであると云ふことをお考へを願ひたいのであります。



次にもう一つ魂のことを申しあげます。今度は商質の方面に付ての魂、承はる所に依ると、商賣と云ふものは成るべく安いものを拵へて、成るべく高く賣り付けて儲けさへすれば宜いと云ふのが商賣であるようによく傳へられるのである。成るべく僅かな勞力を以て成るべく多くの収益を得る、それから先きは自分勝手だ。さうして作つたものは魂が入つて居らぬ。例へば水入を作れば鱈が入つて居る。一寸落せば歪になる。斯う云ふものを唯多量に作つて、安く賣つてうんと儲ける。是では魂が入つ居らぬ。之を一つ作るのに何の爲のコップである。お婆さんお爺さんも子供も之を使ふのである。是で水を飲む場合に是が薄くつて鱈が入つて、口に行つた時分に人が怪我をしては相濟まぬ。どこか傷はないかと言つて、始めて此商品に魂が出来る。帽子を一つ作るにも、ナイフを一つ作るにも之を以て何にするかと云ふこ

とを考へなければならぬ。福岡に或る裁縫塾があります。私はそこに行つて大變感心したのですが、裁縫に依つて修養されて居る。一つの裁縫に付て能率裁縫と、精神裁縫とある。能率裁縫と云ふのはミシンでがちや／＼とやつて行く。精神裁縫の方はちやんと座つて日本流に針を運ぶ。成程能率の方は宜いけれども、能率は一つの精神も入らない。精神の入らぬこともないでせうが、機械でやるので一ツ一ツには精神が入らないでせう。此方は自分の心と精神でやつて居る。そしてこの襦袢は誰の襦袢であるかと云ふことを考へる。これは家のお祖母様の襦袢である。お祖母さんであるならば、さぞ風が入つてお寒からうと云ふので、目を細かく縫つて風が入らぬやうにする、是は家の悪太郎の着物であるとするれば、どうも鍵裂きをして仕方がないから、さう云ふ綻びる所は、しつかりした固めを入れて行く。そこで裁縫をやりつゝ、成程能率には遅いかも知れぬが、そこで養はれた精神が總てに現はれて行くのである。裁縫にも魂がある。それは嫁さんが自分のお祖母さんお母さんお祖父さんのものを作る主人の物を作ると子供のものも作ると云ふことで魂があるから其人々に相應するものが出来るのである。是は只賣れば宜いと云ふのでは、時には中に針など入つて居つて、着て見ると刺して痛いことがある。

魂を作るといふことについて、私が今日自力更生の非常に唱道せられる際、一つの實際問題として是非お考を願ひたいのは、歐州大戦に於ける好景氣時分の日本の商品である。私は其當時偶歐羅巴戦線に居りましたが、總てのものが皆品切れで何もなくなつた。そして来るものは日本品ばかり、日本と亞米利加で一先懸命作つて居る。殊に日本からいろいろの商品が来る。メリヤス、鉛筆、ナイフが来る、幾多のものが日本から大いに入つて来る。日本國民が二十何億と云ふ正價を握りましたのも其お蔭である。何故魂を打ち込んで下さらなかつたか、商工の中に商工の道がないので御座るかと残念に思ふのです。澤山物が参るからと云つて買ふ、私は鉛筆を買つた。戦線に行きまして其鉛筆を使

ふと、じやり／＼云つて書けませぬ。石か何か知らぬが、鉛筆は黒く出るが引か／＼つて書けぬ。それからそれを持つて歸つて、此鉛筆は駄目じやないか、もつと宜い鉛筆はないかと云ふと、これは日本製品である、日本から持つて来たものである。御覽なさいと云ふ。ぐる／＼廻して見ると成程メイド・イン・ジャパンと書いてある。それはまだしも、次には鉛筆を削つて行くと心が無い。鉛筆の両方に心があつて真ん中に心が無い、中心抜き鉛筆である。ナイフを抜いて見ますと、バネがないから止らない。後へ廻つてしまふ、バネなしのナイフである。それからメリヤスシャツと云ふやうなものが澤山来ます。それが戦線で斯うやつて伸びをすると袖が出て来る。脱いで見ますと、ミシンはか／＼つて居ますが、ぞんざいにしてあるものですから、少しやるとミシン糸がぬけて袖が前に出て来る。まあ例を挙げれば幾多あります。面白いのはハバロフスクの某商店に「日本商品到来せり、但し堅牢保證せず」とやつて貼つてある。そればかりでない、總てのもの皆さうである。全部粗製濫造で、戦線に於ては當時は戦争中ですから餘り修理洗濯其の他が利かない。買つたら破れるまで着て居らなければならぬ。其當時には着ると直ぐに傷むものばかりあつたから、粗製濫造が天下に響いて、彼の風雲の當時は日本の商品が世界を埋めて居りましたから、不幸にして此粗製濫造、全く不正の品物が歐羅巴の津々浦々にまで紹介せられたのである。斯くして儲けました二十何億の金が歐州大戦後の不信用に依つて、遂次其市場を他の國に奪はれてしまつた。所謂今日の不況に遭遇したのは何の爲であるか、我自ら招いた魂のなき商工業の結果であると思ふのであります。物にも魂は要る、當時私共の頭に浮びましたのは、商賣に凡そ廣告と云ふものが必要である。廣告料には随分莫大な金が使はれるやうであるが、何故當時二億なり三億なり五億なり十億なり思ひ切つた借金をしても廣告料を取つて、世界の市場に向つて日本の商品を紹介する方法を取らなかつたか、而も當時非常に便宜な方法があつた。其方法は、其商品悉くを慰問品を作り上げるのです。歐羅巴大戦には我國も聯合國の一として責任

を負うて居りますから、其友邦に對して、せめてもの慰勞として慰問品を贈る。其慰問品は日本の好い商品で、しかも歐羅巴なり亞米利加なり、何處でも宜しい、總ての津々浦々に向つて役に立つ品物を全部入れてどしどし出すのです。向ふでは歸りがけの船には慰問品なら必ず只で積んで行く。而も只で配つて呉れる。郵便税も要らなければ輸入税も要らない、何にも要らずに日本の商品を二億なり、三億なり向ふにやつて御覽なさい。永久に残る所は感謝である、日本人は誠に感心であると敬服する、而も品物は其の目的で作つたものであるから、永遠に保存が出来る。三年も十年も使ふ、例へば日本の慰問品として貰つたものは皮の手袋であるが、十年も使つてまだ此通りである。是は記念品だから神棚に上げて置かうと云ふことになる。さうして二億でも三億でも十億でも此魂の籠つた廣告をやつた結果として一面に於ては精神的の感謝を受けると同時に、日本の品物は實によく持つ品物である、多少高くとも、況んや安いに於ておやと云ふことになる、今頃は不景氣所でない、賣切申候なぞと云ふことで済むのである。敢て政府の御危介になつて、蠶糸がどうである、何がどうであるとか申さぬでも、お互ひが待つて居つて、歌羅巴からもそろ／＼戦争が始まりさうだからとか或は今旅行するのであるからと、或は山登をするのであるからとて、三ヶ月なり一年なり持久し得る品物が欲しい、それは日本品に限る。一度持つた以上は一年でも二年でも買はずにしまつたと云ふので、今頃は確實な市場が開拓され商賣が出来たであらう、何故そこに至らなかつたと云ふと、魂を失つたからである。日本精神を失つて商工道に眩んで居つたからである。當時魔が射した結果である。回顧いたしますと、我々にも罪がありますが、どうぞ其ことを御考慮願ひたいと思ひます。



次に農家の問題に入らなければなりません、今や農家は非常なる努力をしなければならぬ時でありますから農家

のことも一言申上げたいと思ひます。農家の仕事である農業は、一つの藝術と私は思ひます。只一つの種、如何に手品が上手でも興行が上手でも、此種一つで以て自然にすつと大きくなつて、何百粒の米が實ると云ふことはたしかに一つの藝術である。此一つの種子から斯んな大きな櫻島の大根が出来ると云ふこともまた一つの藝術である。天のなせる藝術である。農家は此の藝術に非常な楽しみを有つて、一つの種をもつて、肥料も要りませうが、一面には天に祈つて是非今年は暑い時には暑く、雨の降る時には雨が降つて、どうぞ五風十雨、甘露の雨を降して、此市場で一番大きな大根を作らせて下さい、斯う祈つて行く所に農家の本當の眞の精神があるのではないかと思ふのであります。其の農家は斯様にして何を作るか、悉く人生にどうしてもなくてはならぬものを作り上げる、直ちに要るものである。直ちに生きて行くものである、此直ちに生きて行くものを、あの艱苦を嘗めあの勞苦を積んで作り上げる所に農家自身としては一つの藝術として楽しんで行く。我々としても滿腔の誠を以て感謝して行く。此處に農家の其面目と消費者の其精神があるのである。之を百姓とか何とか云ふから間違ひである、實に相濟まぬ。あなた方が居つてこそ日本豊葦原瑞穂國が立つのである、斯う云ふ感謝の念を何故起さないか。一面に於ては藝術として楽しみ、一面に於ては感謝の念を起したならば、率勢米價がなくても濟んだんではないか斯く觀て來れば一つ農家の農道と云ふものに對して考へる必要がありはせぬかと思ふ。聞く所によれば最近茨城縣に農人形の銅像が立つといふ。私は茨城縣に参りまして、此農人形の實物の模型を拜見しまして、如何にも烈公が農人形を作られて絶へず之感謝の意を捧げたと云ふことは、如何にも領主の徳が輝き見えるのである。何故皆が此心持にならぬか茨城縣の方も此の中にお出でになると思ひますが、今度農人形の銅像を建て、廣く農人形あるを天下に示した事は非常に意義のある事と存じます。我々も農人形に對する烈公の心持を我々が踏まなければならぬ。食卓の上に宜しく農人形を置くべし、さうして朝な、夕な誠に御苦勞で御座つたと言つて烈公の心持を汲みつゝ粒々辛苦になつた所

の食事に對し、感謝の意を現す事は我々の務めではないかと思ふ。又我々の踏むべき道でないかと斷ずる。此魂が自然に農家に映つて行つたならば、農家では如何なる感に打たるか、蓆旗で来る事なくなるのである。又それを感謝の念にして、只米は安く買つてやらうと云ふやうなことをするから魂が入らず農村問題が忘れられる。神戸に於ては自力更生の農人形を作られて居る。私は兩方共頂戴して、今日子女の教育に資して居る。必ず子女は農人形を食卓の上に於て、無心にも有心にも農人形に向つてお辭儀をして神様に對すると同じ様に御苦勞で御座ると云ふ氣持になつて居る。皆が斯く考へて呉れるなれば農業問題の基礎がそれから出發を致して参りまして、問題は忽ち解決が出来るのである。只それを算盤を採つて生産費がどうだと言ふ許りでは精神を失つて眞の改革は出来ぬ。此處も一つ皆さんお考へ下さい。昔、私達の子供の時分に、米粒一つ便所の中に落ちて居つても目が潰れると言はれた事も考へて見たい。此の尊いものを使所のやうな所に落して置いて顧みないと云ふ事では相濟まぬぞ、目が潰れると云ふて、一つ落ちて居つてもはつと云ふやうな心持が起つたのである。今日果してさう云ふことがあるか、兵營に行つて見ますと米か溝の中に流れて居る。是は自分の米でないから構はぬといふ有様、それではいかぬ。農家の子弟が兵營に入つて来て、人のものだ、自分に利害關係がない、さう云ふ魂のないことではいかぬ。此處に一つ考を及ぼさなければならぬ。私は農家としての魂は我々日本國民悉くに對して、食料を供給する天然の藝術を樂んで行くと言ふ所にあると思ふ。我々も御苦勞様でございましたと云ふ感謝の念がありますならば、これから出發いたしました農村の更生も出来るのではないかと考へるのであります。

斯く考へますと、最初の奮闘努力より出發いたしましたで、次で日本の 皇室の御徳即ち惟神なる道によつて總てのものを考へて見ますに、皆唯今申した様な魂が入らねばならぬ。我々軍人も先程申し上げた通り此道に依つて 皇徳を盛

にする爲に戰をする。それ以外に武を濟すようなことは斷じてないやうに努力奮闘を致しまして、過去の歐米の總ての糟粕から脱却して、眞の日本陸軍を建設して行きたいと考へるのであります。我々はさう言つた事を日本精神と申して居りますが然らば日本以外のものは構はないのであるか、歐羅巴は宜いのであるか、亞米利加は宜いのかといふと我々は何處までも先程申上げた仁愛の道で行くのであるから、排他であつてはならない、大きく凡てを擁護して全部世界のもの懐に入れる寛容な心がなくてはならぬ。日本は神の國であるから、それはいかぬ是はいかぬと吝な事は申さず、唯今述べた如く狼として飛び掛つて来たならば人間の面を被つて居つても眞正の狼でも容赦せぬが、しかし假令狼であつても我々も同じやうな心持になつて呉れるならば、狼もお出で家に入れて置いて置いて差支ない、それだけのことは考へねばならぬと思ひます。日本人が排他でないと思ふことを一、二終りに話を致しますと、第一、物に拘泥して居らない、よく容れる而してよく應用する、支那人が日本の文化はどうかと言はれる時分に、日本に文化はある、どう云ふ文化だ、目に見えない、字に書かない、そこに日本の文化がある、神様に文字はない、神様に會話はない、日本は神國であるから自ら齷齪して餘計なものは作らない、故に文字は全部支那から拜借いたしました、間もなく日本流にちやんと翻譯し又ちやんと消化をした。そこに偉さがあつた。ちやんと抱擁をして消化したのが假名である。弘法大師や吉備眞備によりて作られた假名である。其假名に依つて支那文字をどうにでも自由に動かして居る。どんな難しい文字が出来まして假名を振れば我々に讀める。どんな難しい漢字も假名で以て自由にこなしてやつて居る、我々新聞など見ると、中にはよく假名がうるさいと仰しやる、あれ程能率の上るものはない「いろは」四十八文字を用ひまして今日から商賣が出来る、今日からでも通信が出来る、今日からでも電報が打てる、世界に文字が多いか知らぬが、アルファベツトを覺えて直ちに通信の出来る言葉は一つもないのである。日本の假名は直ぐに「いろは」にはへとちりぬるを」

で直ぐ出来る。アルファベットのABCを幾ら覚えなくても、それだけでは通信が出来ない。矢張り「ザ」はTHEとか、又ドックと云ふとDOGと書かなければ通信が出来ない。ドックを犬と覚えなければ、ABCだけでは通信が出来ない。犬はイヌ、来いはコイ、お出でなさい。直ぐどん／＼出来て讀むことも出来れば書くことも出来る。又支那の文字を入れてこれをこなして今日役に立つやうになつて居る、斯うまあ考へられるのである。而も是はお笑ひ話に申上げますが、千年前に作つた此文字は今日電報の役に立つて居る、支那の文字を我國に入れて其儘ぐす／＼言はずに之を假名にこなしてしまつて今日は直ちに無線電信其の他の通信が出来る。支那ではそれ程文字があつても電信が打てない、何萬と云ふものがあつても、モールス符合に變へることは出来ない。ツウウチョン／＼とやつても支那の字を一字打つには大變である。四十八文字ならツーチョン／＼で無線電信が出来ると云ふことは、支那人よりも日本人の方が、千年頭が進んで居ると云ふことを能く人に言ふのであります。日本人は何にも遠慮がない、こたはらないで、虚心平氣になつて居るが、神の國だから自分の魂だけは忘れて居らぬ。故に直ちに支那の文字宜しいと、それから弘法大師は諸行無常を「色は匂へど散りぬるを我が世誰ぞ常ならむ有爲の奥山今日越えて浅き夢みしるひもせず」と斯う發明されると、千年後の今日まで電報の役に立つ。現在に於てもさうである、歐羅巴のものなども、向ふものが宜ければ皆採る、悪ければ吐き出す、早く採つて早く吐き出す、必要があれば消化する。我々の洋服もさうです、帽子もさうです、何處までも我々は袖の附いた着物を着て、昔のやうに草鞋を穿ちて居らなければならぬと云ふやうなことは申さぬ。其時に依つて唐風にもなり、歐羅巴風にもなり英吉利風にも亞米利加風にもなる。その長所はこれを探り短所はこれを捨てる。だん／＼是が進化して行つて何時か日本風になつてしまふと思ふ。言葉もさうです、全部受入れてしまつて、其言葉を悉く消化してしまふ、ステッキ、ナイフ、ペーパー、カラー、カフス、ネクタイ算へ切れぬ程ある、皆其儘である。オリンピックク

の總ての用語など分らない位使つて居る。我々は追付かない、モチ、モバ、モボ、モガなどと云ふことを言つて居る。それを皆消化する、豚のカツレツを掴へて、トンカツと云ふあたりは實に微妙である。あれは豚カツと言つても宜いのである。豚のカツレツと言へば宜いがそんなことを言はずにカツレツと云ふことを其儘使つて豚を持つて來て豚カツ、トンカツと云ふあたりは、弘法大師様が今も居られるのではないかと思はれる。さう云ふ氣持で總てのものをに入れて、物的でも心的でも、有りとも有らぬる世界のものを入れて日本に消化して、而も自分の魂だけは持つて行くと云ふ所に、日本の將來の永遠の使命も出來れば、天壤無窮の我が、皇運が進むのもそこにあると思ふ。日本の魂の保持と共に全部抱擁して貰ひたい。此點をどうぞお忘れなく、排他的にお成りにならぬことを何處までもお願ひをして置きたいと思ふのであります。



翻つて今日滿洲の問題、國內の總ての問題等に就て考ふるに成程困難がありません。まだ國際聯盟も何ともいうて居らぬ。亞米利加は怖い顔をして居る。英吉利、佛蘭西等も何となく蔭慘な空氣があるかのやうに我々には響くのであります。實はさうでないかも知れぬのですが、内にあつてはまだ／＼時局匡救で以て随分前途多難である。此處で一つ之等の問題に付て直ちに今日爲すべき所の魂をそこに打込んで戴きたい。其魂は外でもなく今まで申しました日本の魂に外ならぬが、外に向つて滿洲問題に處する道であるが此問題は承認によりて一段落つきましたが前途は全く不明である。滿洲問題は屢々皆さんのお耳に入つて居るが如くに、眠つて居つた日本精神が時局多難なりと云ふことで甦つたのである。此眠れる精神が甦つたことが即ち滿洲事件である。即ち其甦つたと云ふ精神を何處までも握らなければならぬ。どう握つて行くか、願れば残念ながら世界はまだ亞細亞と云ふものを本當に認めて居らないやうに思れる、況んや亞細亞の一角の我が日本の國の其存在など本當に認めて居るのか認めて居らないのか、甚だ懸念に堪へない點が澤山ある。先般

誰かドラチオでいろ／＼放送されて居る間にも、誠に心外に堪へざる程日本を理解せざる物語が澤山あるのである。先般従軍いたして居つて、私共の承知して居る間に於ても、日本の國の人口、之に對してルーマニヤの田舎でありました。宿を一夜いたしました時に、いろ／＼話をすると、ルーマニヤの此宿の先生が、日本にはどの位人口があるかと申しますから、當時の記憶でしたが六、七千萬と申しますと、首を傾けて考へて、桁が違ふのでないか或は語學が足りないかといふ。考へ直しながらどうも間違つて居らぬ。確かに六、七千萬と云ふとルーマニヤでさへ六百萬の人口を有つて居るのに日本が六千萬かと云ふ。我々は如何に考へてもルーマニヤと日本と一緒にしやうとは夢にも思つて居りませぬ。ルーマニヤにすると、ルーマニヤと日本と一緒にするどころかルーマニヤの十分の一位に考へて居る。でルーマニヤでさへ六百萬あると云ふ、斯う云ふ有様は歐洲大戦中でありませぬ。笑ひ話ですが某が埃太利留學中、日本人は一年に何人生れるかと斯う尋ねられたと云ふて憤慨して居た。犬猫ならいざ知らず、多くも一年に一人しか生れないのに決つて居る、然るにさう云ふ問を出すのである。併し此間ラジオで御放送になつた所を承るともつともつと日本を理解して居らない。今日に於てすら然りだ。亞細亞と云ふものは總てに對して全く忘れられて居る。歐羅巴に於て結ばれたる國際條約は、何處までも歐羅巴を天地としてそののみをみて決められて居る。これに對抗して亞米利加は何處までも亞米利加を前提として、南北亞米利加を一緒にして亞米利加モンロー主義の下に、亞米利加のことは亞米利加で處理すると云つて歐羅巴を相手にして居らない。必要の時には歐羅巴の中間に入りませんが、用がなければ超然主義を取る。亞米利加と歐羅巴と云ふ二つのものはちやんと世界に認められて居りますが、殘念ながら亞細亞だけは、是だけ多くの人口、是だけ大きな領土を有つて居りながら正しく認められて居らない。世界は亞細亞を知りませぬ。一般のものは今日でも蒙昧なる多少進歩して居る半開の民族の寄り集り位にしか恐らくは考へて居らない。従つて日本の精神日本の文化が如何なる

ものであるかを知りませぬ。即ち今日の場合こそ此歐羅巴の總ての舞臺に對し、將又亞米利加の總ての舞臺に對して、亞細亞の精神、亞細亞の文化、亞細亞の道德、進んでは日本の精神、日本の文化、日本の道德は斯くの如きものなり、日本民族は斯くして我々の使命を果すべく生きて居るのであると、只今申上げたことを世界に表明いたしました、少くとも歐羅巴に對して認識せしめ、亞米利加に對して諒解せしめて、而も日本は亞細亞全體を背負つて世界に認識せしむるだけの氣魄と、信念を持たなければ、今日日東に國を成せる日本としては相濟まない。日本國民としては恥づべきである。今日こそ正に非常な宜い時期である。佛蘭西は今回の事に就て日本に好意を寄せられては居りましたが、然し先年の國際聯盟には日本には味方をしない而して十三對一のあの慘敗をしたのである。情ないかな亞細亞を認識されない結果である。先年十三對一まで行つた争ひは、今回は五十三乃至五十六對一で争はねばならぬことになるかも知れぬのであるか、何れにしても世界に對して亞細亞の文化は斯様なものである、亞細亞の現状はか様なものである。亞細亞一般の平和を保ち、亞細亞一般の民族と云ふものが安寧に行く爲には、斯様にお考へ下さらなければならぬと十分知らしむべきであつて、而も其陣頭に立つて參る日本としては、只今申上げたやうな公明と仁愛の二徳に劍の一徳を加へ、皇室を仰いで天壤無窮に何處までも行く。其間に之に障害を與へるものがあれば、何としても排除して行くぞと云ふ此の精神を、歐羅巴と亞米利加に知らすことが今回の滿洲問題に對する第一の劍である。此劍なしで、只權益だ金儲で鑛山だ鐵道だ商賣だ生命線だと考へて居ると、先程申上げた歐羅巴大戦中に世界に甚だ粗製濫造の廣告をしたやうなことになるので、此の心持をしつかりして之に對抗する魂があるならば虎狼が来るならば虎狼敢て辭せぬぞといふ考を有つ必要があると思ふ。斯くして進んだならば私は第一の國外の問題と云ふものは解決が出来るかと考へます。而も只今申上げた通り來るものは悉く手を擴げて拒まざる式に我等と同一の考とならるゝならば何時でもお出でなさいといふ氣持で、歐羅

巴だけが天地でもなければ、亞米利加だけの地球でもない、亞米利加、歐羅巴、亞細亞、と少くも是だけのものは互に對等の資格を以て相協調して行くと云ふことを知らすだけの責任を持たねばならぬ。而も亞細亞に於てはどれだけのものがある。支那中華民國を見るところ、云ふ有様である。進んで總ての亞細亞の我々の同胞を見ますと、誠に残念ながら一人立をして行くのには前途まだ遠いのである。併しながら我々は亞細亞に生れたのでありますから、是だけの亞細亞の大家族を率ゐて、健全でしかもまた働き得る我々は、泣いても笑つても是だけの大世帯の家族、而も其中には十分に働き得ないものゝある總ての家族を背負つて、此家族の爲に死物狂で働かねばならぬぞと云ふ考を有つて、此時局に向つて進むと云ふことを考へないと此難局は切り抜け得られない。さうして考へて行きますと是だけの問題でも生優しいことでない、今日自分だけが生きて居れば宜いと云ふ考で居つたら、亞細亞民族に對して亞細亞の中堅たる日本としては相濟まぬ。此點は一つお考へを願ひたいのであります。



然らば内にあつてはどうか、時局匡救の爲に只今總理大臣からだん／＼お話がありました通り互ひに相救濟せよ救濟せよと云ふことでなくて、自ら立つてやるのである。難關宜しい、我々の腕の有らむ限り行くのである。而も皇猷扶翼の道に向つて何處までも自力で行くのであると云ふ氣魄を以て行くのである。只俺ばかりが一人幸福であれば宜いと云ふことであると前申述べた震災の時の様な事になるのである。諸君どうぞ日本の道に従ひまして皇猷扶翼の大道に眞直に進み、萬民悉く陛下の赤子である。と云ふ仁愛の道に依つて、商賣をするならうんと儲けてうんと萬民幸福の爲に陛下に盡すのである。總ての農家で仕事するのも、これだけのものを拵へ上げて之を萬民幸福の爲に陛下に盡すのである。此の氣持で自力更生に向はなければならぬ。繰り返していふ、只一人安かれと云つたんでは大震災火災のあの悲惨を

嘗めると同じことになるから内に於てはうんと働きうんと儲けて、これは悉く萬民の幸福の爲である。凡て陛下に御奉公すると云ふ大きい魂を有つて萬事をやつて戴きたいと思ふのであります。どうぞ前途多難でありますので、今日の時局に對しまして、禍を轉じて福と爲し、本當の日本と致すと云ふことに付て、先づ魂を打込まれて、一つ死物狂ひで根本に立ち、皇猷扶翼、即ち陛下の御徳を御扶け申すといふ事を念願して、内外の事にこの魂を發揮するやうに自力更生をし、否國家更生、民族更生をするのだと云ふことを考へて、どうぞ我々と共に御奮闘あらむことを願ひする次第であります。

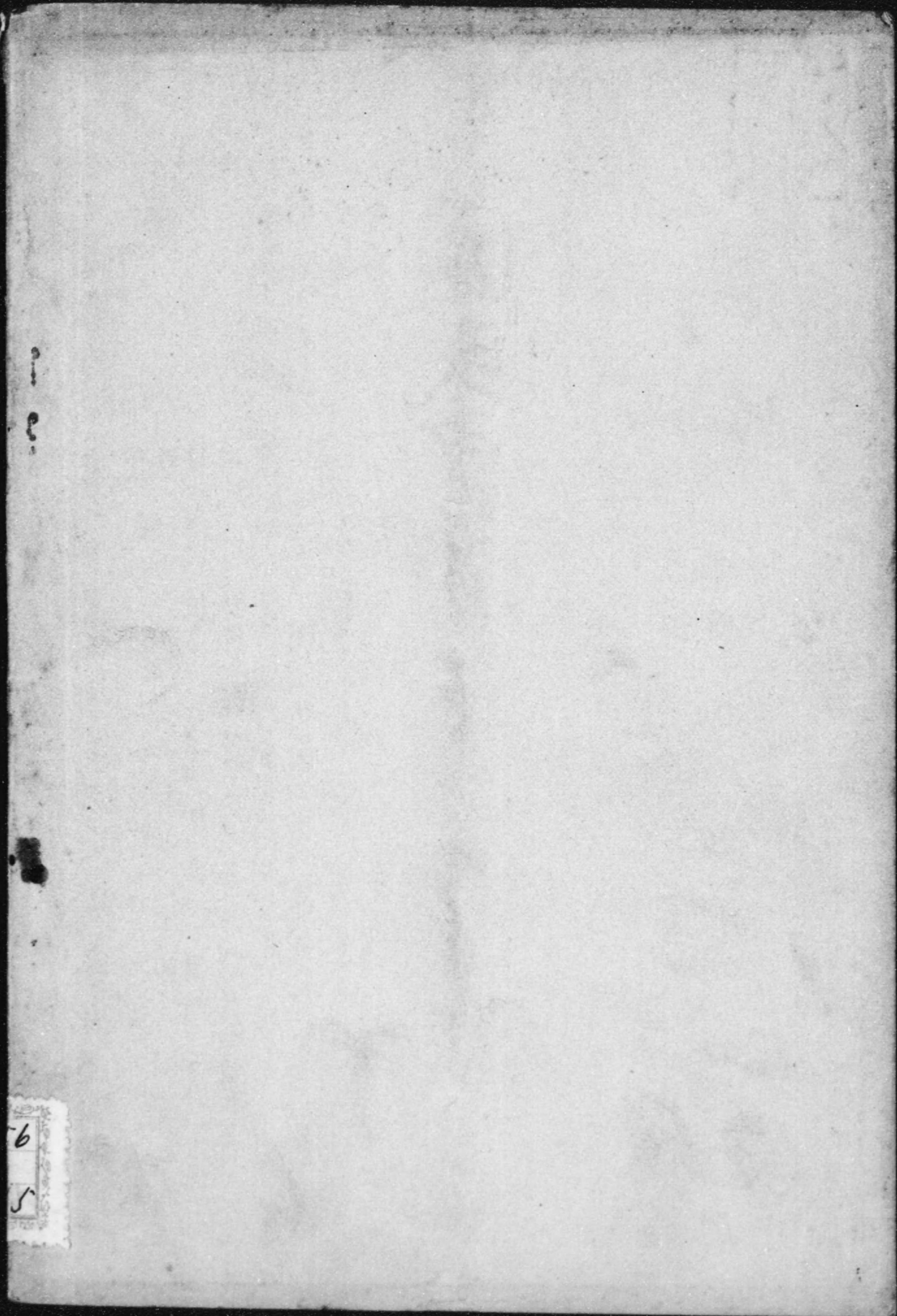
356
845

昭和十年十二月二十日 印刷
昭和十年十一月二十三日 發行

東京市小石川區白山御殿町一〇六番地
發行人 小 原 玄 靜

東京市小石川區氷川下町五四番地
印刷人 米 山 玉 穗

發行所 東京市小石川區白山御殿町一〇六番地
更生會



6
5